

九州王朝説と女王卑弥呼

日本の古代史では弥生時代の邪馬台国の存在が重要であるが、その所在地をめぐって、江戸時代、明治時代、そして戦後70年を経た現在に至るまで、様々な議論が交わされ、古代史学会では決着がつかない（近畿の大和説が最有力だが他に筑紫、筑後の山門、日向などが有る）

今回はその中の一説「九州王朝説」を取り上げる

併せて日本の代表的な史書「日本書紀」がそれにどのように関わっているかを検討する

九州王朝説の提唱者古田武彦(1926~2015)は東北大(日本思想史)卒、各地の高校国語教師(松本深志、神戸森、神戸市立湊川、京都市立洛陽)竜谷大講師を経て84~96年昭和薬科大教授となった。初め親鸞の研究者として知られたが、69年「魏志倭人伝」の研究を発表し「邪馬台国は邪馬壹国の誤り、女王国の所在地は博多湾岸であり、その系譜を引く九州王朝が存在した」と主張した。

読者の間で「古田史学」と呼ばれて各地に支持者の研究会もあるが、古代史学会ではそれを認めず古田存命の最期まで、古田は学会や中国・韓国などの学者と討論する国際会議への出席を拒まれた。

古田は出版社の仲介する場では学者たちとの討論を何度も行ったが学会では発表の場を全く与えられなかったのである。

弥生時代について述べた日本の史書は、古事記・日本書紀であるが、成立が8世紀であり、後で説明するように内容に信頼し難い点がある。お隣の中国には同時代に書かれた正式な史書「三国志魏志」がありその中の「倭人伝」に日本のことが詳しく書かれているのでそれを取り上げてみる。

1. 三国志魏志倭人伝

著者 陳寿 (成立、284)

三国とは、魏 220~265 都は洛陽、蜀 220~263 都は成都、呉 222~285 都は南京を指す

三国志の構成は、魏志、蜀志、呉志から成り、魏志の最終章に夷蛮伝(鳥丸、鮮卑、東夷)が書かれその東夷伝には、高句麗、夫余、東沃沮、濊、挹婁、韓、倭人の各伝が含まれている。

倭人伝は、東夷伝の中で、他の諸伝に比し非常に詳しく書かれており特別扱いになっている。

尚、著者の陳寿は、元蜀の官吏だったが、蜀が敗れた後、魏(後に西晋)の宰相張華に呼ばれて三国志を執筆した。

三国志と言うと先ず「三国志演義」を思い浮かべる人が多いがここで取り上げるのはその「演義」ではない。演義は、三国時代(魏、蜀、呉)を舞台として書かれた通俗歴史小説である。南宋代の都市で語られた講談などが元代に「三国志平話」としてまとめられ、更に雑劇の要素を吸収して明代に完成した。人気が高まるにつれて様々に粉飾されているため史実に忠実ではない。

登場人物には、劉備、関羽、張飛、諸葛亮(孔明)、劉禅、馬謖、曹操、曹丕、曹植、司馬懿(仲達)、孫堅、孫權、孫策、周瑜、諸葛謹など。尚、神戸には関羽を祭った関帝廟がある。

(1) 倭国への経路の里程表記

「倭人は帯方の東南大海の中に在り山島に依りて国邑をなす旧百余国漢の時朝見する者有り今使役通ずる所三十国」

帯方とは後漢の末期楽浪郡から分割されて帯方郡となった地を指す(現在のソウル付近)

使役通ずるとは倭国が三十国を支配しておりその女王の卑弥呼が三十国を代表して中国の天子に貢献して来たことを以て天子の支配がそれらの国々に及ぶことを示す。

「郡より倭に至るには海岸に循いて水行し韓国を歴るに、南し東しその北岸狗邪韓国に至る七千余里」

狗邪韓国は朝鮮半島の南端に位置し後に任那日本府と称される（韓伝に“韓地の南は倭と接す”）

「始めて一海を渡る千余里對海国に至る（略）方四百余里なるべし（略）又南一海を渡る千余里一大国に至る（略）方三百里なるべし」

（略）とした箇所には 官の名称、戸数、地形、田畑、山林、食物、交易など風土・民俗に関する記述が有るがそれらを省略している（以下同様）

「又一海を渡る千余里末盧国に至る（略）東南陸行五百里伊都国に到る（略）世に王有るも皆女王国に統属す郡使の常に駐まる所なり東南奴国に至る百里（略）東行不彌国に至る百里（略）南投馬国に至ること水行二十日（略）南して邪馬壹国に至る女王の都する所水行十日陸行一月（略）」

「次に斯馬国有り次に・・・（19国が続く）次に奴国有り此れ女王の境界の尽くる所なり其の南狗奴国有り男子王たりその官に狗古智卑狗有り女王に属せず郡より女王国に至る萬二千余里」

ここには帯方郡から邪馬壹国（女王国）までの総里程が書いてある 他方では部分里程が書かれそれは不彌国までしかない このことについて学者間で様々な議論が交わされた

部分里程が書かれているのは 帯方郡から女王国までの主線行程上の国々であり傍線行程上の国々あるいは女王国以遠の国々については国名を記して里程を示さなかったと 古田は理解したのである

女王国の最終的な所在地については 大和（近畿）説、九州（筑後山門、筑紫、宮崎日向など）説があつて激しい議論が交わされた

中でも白鳥庫吉（東大教授）の肥後説と内藤湖南（京大教授）の大和説の対立は有名であるが 白鳥は「萬二千余里と言うと赤道を越えてしまう 倭人伝は嘘だらけで中国側の使者が恩賞目当てに距離を5～6倍にしている」と書き この点は内藤も同調した

(2) 長里と短里

古田は三国志（魏志、蜀志、呉志、夷蛮伝）の中の全ての里程表記を調べ それらが全て短里（70~80メートル/里）であることを証明した

倭人伝で 一大国（壹岐）を方三百里としているが東西南北約20キロメートルであるから 67メートル/里に相当する

韓伝で 韓地（馬韓、辰韓、弁韓）の大きさを方四千里としているが東西南北約320キロメートルなので 80メートル/里に相当する

又史書の里程表記議論とは別に 1980年京大工学部の谷本茂が周代の天文算術資料「周牌算経」を研究し周代の里程は76ないし77メートル/里であることを科学的に証明した

又 古田は司馬遷の「史記」、韓国の各種歴史書、日本の風土記などの里程表記を調べて これらには長里と短里の別があり時代によって使い分けられていることを明らかにした

ア、古代の 夏、殷、周 時代には 短里（70~80メートル/里）

イ、秦、漢 時代には 長里（435メートル/里）

秦の始皇帝が 文字、度量衡を統一した

ウ、魏、西晋 時代には 短里

古代の聖王の政治（夏以前）を尊び古法に復帰すると記述有り

エ、東晋朝では 長里

東晋の劉が漢の正統後継者たることを示すために 新法に復帰すると「晋書」に記述あり

オ、隋、唐時代 も 長里

(3) 女王国の所在地

倭人伝の里程表記を吟味する

先ず「帯方郡から狗邪韓国（倭地）まで七千余里」について 従来の学者たちは水行七千里としてきたが 古田は陳寿の表記を厳密に読み取ろうとした

ア、「韓国を歴る」は 漢書劉向伝の注に「歴、之を歴観すると謂う」に倣って「韓国をつぎつぎに見る」の意と理解する

イ、「乍ち～し、乍ち～し」の熟語的構文は 三国志の用例から「小刻みに繰り返す」の意と理解する 従って行程の最初の記述は「先ず海岸に沿って水行して帯方郡西南端（韓国西北端）に至り そこから上陸して陸行にうつり 南下、東行を階段式に小刻みにくり返して狗邪韓国に至った」と読み替える 次に「至る」の用法を先行動詞との関係において検査する

- ① 従 ～ 至倭（倭に至る）
 - ② 度 ～ 至対海国（対海国に至る）
 - ③ 渡 ～ 至一大国（一大国に至る）
 - ④ 渡 ～ 至末盧国（末盧国に至る）
 - ⑤ 南（ナシ）至奴国（奴国に至る）
 - ⑥ 東行 ～ 至不彌国（不彌国に至る）
 - ⑦ 南（ナシ）至投馬国（投馬国に至る）
 - ⑧ 南（ナシ）至邪馬壹国（邪馬壹国に至る）
- ⑧ は①の先行動詞を受けているから動詞が無くても主線行程と見做されるが⑤奴国と⑦投馬国は傍線行程と見做される

次に「島めぐり」読法について 古田の方法を見る

対海国と一大国はそれぞれ方四百里、方三百里の大きさが有り 島内の地形や産物、生活まで記述されているが 従来の学者たちはこの島を行程計算から外してきた 陳寿は「倭地を参問するに ～ 周旋五千余里なるべし」と記しており この「周旋」の語は三国志の中でくり返し使われていて その用法は A 地から B 地に直行するのではなく その実地の屈曲した地形や実情にしたがってそれに沿って旋めぐるという使い方である 従って対海国は（北島は方四百里より大きいから、南島に限る）方四百里の四辺形の二辺、一大国は方三百里の二辺を旋るものとして 四百里と三百里の各二辺を加算する

上記によって得られる里程を並べると下記の如くなる

- 7000 里 帯方郡治 ～ 狗邪韓国 （水行 α 、陸行 β ）
- 1000 里 狗邪韓国 ～ 対海国 （水行）
- 800 里 対海国 （陸行）
- 1000 里 対海国 ～ 一大国 （水行）
- 600 里 一大国 （陸行）
- 1000 里 一大国 ～ 末盧国 （水行）
- 500 里 末盧国 ～ 伊都国 （陸行）
- 100 里 伊都国 ～ 不彌国 （陸行）

合計 12000 里 この内 水行は $(\alpha + 3000)$ 里 陸行は $(\beta + 2000)$ 里である

又 古田は三国志の記事多数を検証し 一日の行軍距離が 200~300 里であることを明らかにした 平均値の 250 里（約 20Km）を採ると 陸行 1 月は 7500 里に相当し β は 5500 里とわかる 従って α は 1500 里となり 水行 10 日は 1 日 450 里（36Km）の船速は妥当と思われる これらによって 総里程 12000 里と 周旋 5000 里をも 無理なく説明できることになる 以上の論拠をもとに 具体的に現在の地名を当てはめると

末盧国	唐津湾岸	伊都国	糸島平野
不彌国	博多湾岸	邪馬壹国	福岡市南部

今まで議論が紛糾していたのは ①短里表記を理解していなかったこと ②朝鮮半島内の陸行を考えなかったこと ③対馬と壱岐の島内を考えなかったこと ④里程表記と日程表記を足して

距離を算出しようとしたこと ⑤戦前の学者には万世一系の天皇家は近畿の大和王朝だとの固定観念があったこと に原因がある

古代史の学者たちは秦漢時代、隋唐時代の文書を多く読んでおり長里のみが意識されていた 69年に古田が短里表記を明らかにしてから何人もの学者が取り上げるようになったが彼らの論文の参考文献に古田の名を記載した例は無い 唯ウィキペディアのみが古田の名と主張を記載している 又 2017年の神戸老眼大学の講演でも講師は一萬二千里と水行二十日を足して説明し日本海を經由して近畿の大和に導いていた

(4) 考古学上の出土品分布と古い地籍名

ア) 倭奴国王の金印

後漢書倭伝に「建武中元二年(AD57)倭奴国貢を奉って朝賀す光武賜うに印綬を以つてす」と書かれている その金印が元明四年(1784)福岡市の志賀島の畑で発見された

中国の天子から賜った国王の金印を大和へ帰る途中博多湾岸に落とす筈はない 船が沈んだ場合には海底にあるはずで畑に現れない

イ) 中国産古代絹と古代錦

古代の交流の記録では中国朝から絹と錦を与えられていたが古代絹の出土は吉野ヶ里(佐賀県) 古代錦の出土は須久岡本(春日市)に限られる

ウ) 弥生時代の三種の神器(剣・玉・鏡)

これらの出土は下記の遺跡6箇所に限られている

吉武高木(福岡県西区)、三雲(糸島市三雲)、井原(糸島市井原)

須久岡本(春日市岡本)、平原(糸島市有田)、宇木汲田(佐賀県唐津市)

エ) 漢式鏡の出土数

福岡県 149(筑前中城 129,筑前東城 16 筑後 4)、佐賀県 11、山口県 1、岡山県 1、兵庫県 2、岐阜県 1

尚 三角縁神獣鏡が多数出土しているがこれらは中国・朝鮮での発見例が無く国内で(漢人鑄工によって)製作されたものと考えられる 尚その出土分布は 近畿 130、九州 32、中国 29、四国 5、関東 35 (時代は古墳時代に限られる)

オ) 室見川(博多)の銘板

自然銅の鑛石に「倭王の宮殿と宝庫を完成した記念」と書かれている その文字は戦国時代の篆文字と春秋時代の篆文字を含んでおり漢字とそれ以前の古代の文字が併せ使用されている

カ) 古い地籍名

太宰市周辺の地名には現在も古代の王朝につながる地名が残されている

太宰 ; 王族の官位の最高位(天子—太宰—太傅—太侍—相国—丞相)

太宰府址 ; 筑紫郡に現存

内裏跡、紫宸殿 ; 筑紫郡の田畑の字名に現存

北帝門 ; 大宰府の基山の上に山城址が有りその門の名

そのほか 九州年号、防御線として築かれた神籠石の分布、沖ノ島の宗像神社境内で戦後発見された数々の国宝級の古代財宝など 王朝の存在跡を裏付けるものが数多有る

古代の財宝が 1300年 にも神社境内に放置されたのは白村江敗戦後 唐からの進駐軍による没収を避けて緊急避難したためと考えられる